

第21回上智大学国連Weeks 植木安弘教授が成果を振り返る

6月7日から24日まで、「第21回上智大学国連Weeks」が開催された。「国連の活動を通じて、世界と私たちの未来について考えよう」のコンセプトのもと、11年目を迎えた今回も、平和構築、人道支援、気候変動など幅広いテーマでシンポジウムなどが企画された。在学生の他、高校生や一般も含め、来場・オンライン合わせて参加者は1,000人に達した。

国連の広報局や事務総長報道官室などの業務に約30年従事し、現在は国際協力人材育成センター所長として



18日のイベントでは国連システム学術評議会(ACUNS)のフランツ・パウマン会長が登壇した

連Weeksを牽引する植木安弘教授(グローバル・スタディーズ研究科)が今回のイベントを振り返る。

世界の分断化がより顕著になり地球規模の課題がより深刻なものとなるなか、日本にとっても関心の高い問題が取り上げられました。

「中東和平を考える」では、発生から10ヶ月が経過するガザ戦争の歴史的背景やパレスチナ問題に関して専門家を交えた議論が行われ、今後の和平実現に向けて考える機会となりました。

第二次世界大戦下、杉浦千畝領事とともにオランダの外交官も発給した迫害ユダヤ人への「命のビザ」の歴史的経緯を示す展示と講演会も開催され、人道支援に対する先人の思いに触れることもできました。

気候変動に関するシンポジウムでは、地球温暖化がもたらす人類生存の危機や、特に子どもへの深刻な影響、集中豪雨がもたらす洪水分析などが専門的観点から議論されました。このシンポジウムには、元国連事務次長補や国連児童基金(ユニセフ)の事務局次長などのハイレベルな登壇者をお迎えし、SDGs達成に向け参加者と意見交換が行われました。

さらに、ウクライナやガザ、アフリカなどにおける平和構築・復興支援に関わる日本国際協力機構(JICA)の役割の説明や、国連システム学術評議会(ACUNS)年次大会の一環として本学がスポンサーとなった「人間開発報告書」の最新版の紹介などがありました。

国際協力・国際機関キャリアセッションでは、世界食糧計画(WFP)駐日代表による講演の後、国際協力人材育成センター(SHRIC)のアドバイザー・ネットワークの方や外務省国際機関人事センターによる対面のクロストークがあり、学生や一般の方に加え多くの高校生も参加しました。

ほとんどのセッションは対面とオンラインのハイフレックスで行われ、質疑応答の時間も含めて活発な議論が行われました。近年は多くの高校生の参加も見られますが、さまざまな問題を自らの問題として考える良い機会になったのではないのでしょうか。次回は、10月に国連Weeksを予定していますので、奮ってご参加ください。

公式ウェブサイトにてイベントレポート掲載中。



植木安弘教授

留学フェア 先輩学生による 体験談や座談会を実施

6月17日から21日にかけて、グローバル教育センター主催の留学フェアが開催され、海外留学を希望する学生が期待を胸に各イベントに足を運んだ。

期間中、昼休みの時間に日替わりのセッションを実施。留学制度や留学準備に関わるレクチャーのほか、留学プログラムを利用した先輩学生による体験談や座談会、協定校からの留学生による自大学紹介、キャリアセンター職員による留学経験者のための就職活動ガイダンスなどが行われ、延べ約500人の学生が参加した。

座談会に参加した学生からは、「渡航の前に準備しておいた方が良いことは?」、「語学能力向上のためにやったことは?」、「海外で行うインターンのメリットは?」などの質問が寄せられ、先輩学生が丁寧に回答していた。実体験に基づく具体的なアドバイス



留学を希望する在学生から多くの質問が寄せられた

聞くことができ、参加者にとっては有意義な情報収集の機会となった。

また、6号館1階では多様な留学プログラムの紹介に加え、留学体験談や上智で学ぶ交換留学生たちの出身校紹介などのポスターが展示され、通りかかる多くの学生が足を止める姿が見られた。

グローバル教育センター担当者は、「今年度は初日の参加者が3割増加した。各日のセッション終了後にも担当者への質問が多く寄せられ、留学への熱気の更なる高まりを感じられた。今後も秋の留学ガイダンスや各プログラムの個別の説明会など、当センター主催の情報収集の場を積極的に活用してほしい」と呼びかけている。

ソフィアの視点

導入3年目を迎えた基盤教育

～生涯学び続ける力を養うための上智の挑戦～

学務担当副学長 伊呂原 隆



2022年度に導入された「基盤教育」。急速に変化する社会と未来の予測が難しい現代において、学生時代に学んだ知識はいずれ通用しなくなります。このような認識のもと、卒業後も学び続けるために、自律的な学修者の姿勢を身につけることが基盤教育の目的です。

基盤教育は、専用の科目があるわけではなく、上智大学が提供する全ての科目を通じて行われます。多角的な視野を得る「全学共通科目」、専門分野を深める「学科学目」、外国語や異文化を理解する「語学科目」。学生は4年間をかけて、これら3種の科目の組み合わせを自ら設計し、受講者同士で議論したり、多くの書籍に触れ自らの考えを深めたりすることによって、生涯にわたって社会を生き抜くための人生の「基盤」を確立していきます。

なかでも特徴的なのが、全学共通科目です。いろいろな分野の入門レベルの科目のみで構成されているというイメージがあるかもしれませんが、そうではありません。基盤教育の実現にあたり、科目ナンバリング(科目の水準や系統を示す番号)で言う100番台(導入レベル)から、200番台(展開レベル)、300/400番台(探究・統合レベル)の科目まで用意しました。専門性を深めた3、4年次においても、それにふさわしいレベルの人間理解、思考様式、教養等を全学共通科目で学ぶのです。

例えば、全学共通科目の300/400番台の科目に「交渉学入門」があります。この科目で学ぶ、相手を引き込む手法は、経済学部生であれば企業間連携の研究に、総合グローバル学部生であれば国際紛争の解決手法の研究に生かせるでしょう。同様に300/400番台の「データサイエンス」科目で実践的な分析手法を学べば、文系学部生でも自身の研究で定量的なデータに基づいた数理的アプローチが可能になります。

こうした学び方のコンセプトや履修の考え方を、学生にしっかりと理解してもらうため、基盤教育の導入として入学前教育「学びを学ぶ」を開始しました。文系/理系、教養/専門、自学科/他学科といった枠にとらわれず、その人ならではの学びの広げ方、深め方をデザインする上智ならではの仕組みを、フルオンデマンド形式で入学者全員にレクチャーしています。

学問分野を問わない多彩な科目を選択肢として自らの学びをデザインできるのは、9学部10研究科がワンキャンパスに集まる上智大学だからこそ。物事をさまざまな角度から見る、多面的な価値観が身に付けられます。「人生100年時代」において、学生時代はまだ序盤に過ぎません。大学をゴールと捉えるのではなく、長きにわたる人生の基盤をつくる成長の場と捉えるならば、上智大学には、それにふさわしい最上の環境が整えられています。

世界各国からの寄付で建造されたキャンパスのランドマーク 1号館が東京都選定歴史的建造物に選定

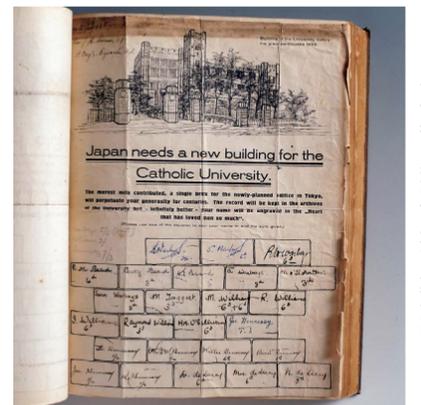
四谷キャンパスの1号館が、6月14日付で東京都選定歴史的建造物に選定された。東京都選定歴史的建造物とは、歴史的な価値を有する建造物のうち、景観上重要なものとして、東京都景観条例に基づき東京都知事が選定するもので、上智学院所有の建造物としては初めて選定された。

1号館は、1932(昭和7)年に竣工し、第二次世界大戦中の東京大空襲を逃れ現在に至る。大正から昭和初期にかけ、日本各地のカトリック教会を設計したスイス人の建築家マックス・ヒンデルが手がけたドイツ風の学校建築で、ヒンデル作品の残存例として貴重であることも評価された。2022年9月には、同建物前に学生たちの憩いの場であるS-TERRASSE(Sテラス)が併設されるなど、現在もキャンパスのランドマークとして親しまれている。

1930年定礎の1号館の建築資金は、寄付によって賄われた。募金活動を主導したのはドイツ人のブルーノ・ビッテル神父で、ドイツ国内だけでなく、オランダ、フランス、アメリカなどのカトリック教会・学校宛てに寄付を呼びかける用紙を送付した。「レンガ募金」と名付けられたこの募金活動では、募金用紙に描かれた「ライヒス



1号館外観と併設の5テラス



寄付者の筆跡が残る募金帳

マルク(当時のドイツ公式通貨)」の印字が入ったレンガのイラストに、各寄付者の署名が記された。複数のレンガへの署名や、金額が1ライヒスマルク未満に書き直されたレンガもあり、当時の1号館が各国の名もなき人々の善意によって竣工に至ったことが伝わってくる。この募金の記録は、現在もソフィア・アーカイブズで保管されている。